

食べるとお腹が張る、もたれる、胃が痛い、などの症状があるのに、検査をしても、胃炎、胃潰瘍、癌などの病気は見当たらない場合、「機能性ディスぺプシア：Functional Dyspepsia (FD)」※と、西洋医学では診断されます。これまでは、機能性胃腸症、非潰瘍性胃腸症、神経性胃炎、胃下垂、慢性胃炎、胃アトニーなどと呼ばれていました。

今回、東洋医学の病名の「嘔 噯」が上腹部不快感・胸やけと訳されることから、機能性ディスぺプシアの主症状と一致しているので、「機能性ディスぺプシア」を「嘔 噯」という病名で示すこととした。

「嘔 噯」とは、「心嘔」「嘔心」とも言い、上腹部の不快感のことで、「胸やけ」なども含まれる。臨床的には、嘔 噯は脾胃の病証であり、「噯気：げっぷ」「呑酸」「悪心」「乾嘔：からえずき」「心下痞」「胃脘痛」などを伴うことが多いとされている症候群のような症状を指す。

「嘔 噯」は、病因病機から、(1) 傷食（飲食の不節制により、胃内に食滞が生じ、胃気の和降が障害）、(2) 胃熱（辛辣なもの・脂っこいものの嗜好や飲酒癖などで胃中に熱が鬱したり、熱邪が胃腑に侵入することにより、胃気の和降ができない）、(3) 胃寒（寒冷の環境・生ものや冷たいものの摂取などによって生じ、胃気の和降ができない。基本に脾胃気虚があることが多い）、(4) 肝胃不和（内傷七情により肝気が鬱結し、肝気が胃に横逆して胃気の和降を障害）の四つに分類できる。

今回の症例は、鍼灸治療により、食道と胃の蠕動運動を同時に改善できたケースである。治療のポイントは正確に「弁病」できたことであると考えている。「弁病」とは、西洋医学的な病態を東洋医学的に捉えていくことをいう。正確に「弁病」することで、西洋医学的な情報を鍼灸治療にうまく活用できたことで、比較的早く治療効果が現れたものと考えている。

#### ※ 機能性ディスぺプシアの定義(日本消化器病学会ガイドライン)

「症状の原因となる器質的、全身性、代謝性疾患がないにもかかわらず、慢性的に心窩部痛や胃もたれなどの心窩部を中心とする腹部症状を呈する疾患」

#### 【症例】

患 者：女，68歳，初診2010年10月21日

主 訴：心下痞，胃痛を患って10年以上になる

現病歴：当院には10年以上前に3回来院しており、当時、胃痛が強く、腹脹や噯気呑酸などが見られた。介護のことを考えると胃痛がひどくなる。職場と親の介護のストレスから起こった肝鬱犯胃型の嘔 噯と診断し治療した。病院では神経性胃炎と診断され、胃粘膜の保護剤と胃酸抑制剤を服用していた。今回、なかなか胃の痛みが改善しないので来院した。病院

では、胃食道逆流症と診断され治療しているが、あまり効果がない。胃カメラ検査では異常は見られなかった。

**現 症：**胃部の不快感、嘔気呑酸、痛み(空腹時痛、食後軽減)。この数年は、食欲なく痩せてきて、疲れやすく、無力感、息切れ、懶言、泥状便、失気が多い、時々午後になると腹脹が起こるといった症状を伴っている。舌質は淡、舌苔は白、脈は細であった。

**弁 証：**脾胃気虚、運化失常、胃気失和による胃痛

**治 則：**健脾益気、理気和胃

**取 穴：**中脘(瀉)、脾俞、腎俞・足三里、三陰交、気海(全て補)

**効 果：**2診後に胃痛は軽減した。五診後には空腹時での胃は痛まなくなり、精神状態は好転し、大便は正常に近い状態となり、失気も少なくなった。中脘を瀉法から平補平瀉に変更し、現在、足が冷えるということで、太衝を加え、足元には遠赤外線で温めている。四か月継続治療しているが、食欲はだいぶ戻ってきたが、食べ過ぎたり、冷たいものを食すると軟便となり、失気もあるので、もうしばらく治療の継続を進めている。

**考 察：**先ずは、中脘(瀉)により、胃の和降を改善し、脾俞、腎俞・足三里、三陰交、気海(全て補)により、益気健脾を図り、食欲の改善を図ることとした。機体があるので食欲も出ず、多く食べられない。脾胃虚弱のため、下痢しやすく、下元不足となっており、体力もなくなっている。この健脾益気、理気和胃の法により効を収めることができた。

治療のポイントは正確に「弁病」できたことである。西洋医学的な情報(病態把握)を鍼灸治療にうまく活用できたことで、比較的早く治療効果が現れたものと考えている。

患者は当院に来院するまでの10年以上もディスペプシアに苦しんでいた。当初、職場環境や親の介護などの七情内傷から機能性ディスペプシアは起こっていたものと考えられる。当時から病院で胃酸分泌を抑制するPPIを調剤服用しており、このことは胃粘膜の萎縮なども起こっているのではないか？。それらも影響して、現在の胃腸虚弱となっているのではないかと考えている。

病機は次の通りである。職場や親の介護、PPI長期服用により、脾気虚弱、運化失職、胃虚失和、気機失調となり、現在の心下痞、胃痛などが出現するようになっている。その証拠に当時、スポーツ好きで元気で活発な状態から、食欲もなくなり、食は細くなり、痩せてきており、脈も細である。

機能性ディスペプシアなどの機能性疾患は西洋医学的な治療で効果が得られにくい病気である。特に、食道の順蠕動を改善させる新薬がないことから、胃食道逆流症などに対しては鍼灸への期待は大きいと考えられる。また、西洋医学では、胃や十二指腸潰瘍、逆流性食道炎などの治療には、プロトンポンプ阻害剤(PPI)が第一選択で強いエビデンスを持っている。細胞のH<sup>+</sup>分泌の最終段階のプロトンポンプを特異的に阻害する。H<sub>2</sub>ブロッカーよりも胃酸抑制効果が強力であり、胃や十二指腸潰瘍、逆流性食道炎などに効果的に使われている。確かにPPIによって食道炎は改善するが、PPIは逆流性食道炎の根本的な病態である逆流を治すことは難しいと考えられている。また、PPI製剤を長期的に使用することにより、消化機能を低下させる傾向がみられることも知られており、継続的なPPI製剤の使用により、食事が食べれなくなり、体力が低下して、生活のQOLが低下している方も

多いのではないかと考えている。

今回の症例は、鍼灸治療により、食道と胃の蠕動運動を同時に改善できた症例である。機能性ディスペプシアは、健康診断では受診者のうち 11～17%に、病院にかかった人では 44～53%にも見つかるという(日本消化器病学会ガイドラインより)。この状況を考えると、「機能性ディスペプシア」は、今後の鍼灸が積極的に取り組むべき疾患の一つと考えている。

### ■胃酸の分泌を抑える薬（酸分泌抑制薬）

「逆流性食道炎」と「非びらん性胃食道逆流症」の大きな原因となる胃酸の分泌を抑え、食道へ逆流する胃酸を少なくする。	
プロトンポンプ阻害薬 (PPI)	商品名：タケプロン，ネキシウム，パリエットなど ※従来，ピロリ菌除菌に使用
ヒスタミンH2受容体拮抗薬 (H2ブロッカー)	商品名：ガスター，ザンタック，アシノンなど
カリウムイオン競合型酸ブ ロッカー (PCAB)	商品名：タケキャブ
★ 胃酸分泌を抑えることで消化機能は低下してしまう。 ★ 特にPPIは長期服用することで、萎縮性胃炎を引き起こすことが知られている。	

### ■ 主な機能性消化管障害

① 非びらん性 胃食道逆流症	内視鏡では、特に逆流性食道炎を示唆する所見は認められないものの、逆流性食道炎と同じように胃のむかつき、胃酸が上がってくる感じがする、つかえ感がある、などの症状を呈するもの。胃と食道のつなぎ目の幽門部の過敏性によるとされています。
② 機能性ディ スぺプシア	胃痛や胃もたれ、すぐに満腹になってしまうなどの症状が長期にわたりあるにも関わらず、胃カメラで何も原因となる所見が認められない時に疑われます。
病院での上記2疾患の治療：胃酸を抑える薬を軸に、必要に応じ粘膜保護剤や抗不安薬、漢方なども投与される。	
③ 過敏性腸症 候群	ストレス等の影響により、腹痛や便秘あるいは下痢などの多彩な症状を引き起こす疾患を言います。
★ 機能性消化管障害は、ストレスが主な原因と考えられている。	